SSKP　東京肝臓のひろば　第 228 号　1977 年12 月3日　第3種郵便物認可(毎月18 回1、2、3、5、6、7の日発行)　2019 年2 月22 日発行　SSKP　通巻第7096 号

東京 肝臓のひろば

平成 31 年(2019 年)2 月号　第 228 号

特定非営利活動法人　東京肝臓友の会

〒161-0033 東京都新宿区下落合3-14-26-1001
電話 (03) 5982-2150　振替 00120-6-40564
FAX (03) 5982-2151　口座名 東京肝臓友の会
http://www.tokankai.com

竹久夢二伊香保記念館　―群馬県・渋川市―　絵・山高 定三さん

新しい年を迎えて

特定非営利活動法人　東京肝臓友の会
理事長　川田義広

新年を迎えて会員の皆様、当法人へのご理解とご支援をくださった皆様に心から感謝を申し上げます。そして今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

今年の冬は昨年よりも暖かいように感じますが、みなさまお元気で新しい年を迎えられましたでしょうか。まだまだ厳しい寒さに見舞われることもあるでしょう。インフルエンザに罹らないよう大事にお過ごしください。今年も穏やかな年でありますよう心から願っております。

ウイルス性肝炎は今なお恐ろしい病気ですが、B型C型とも新薬が生まれつつあり、多くの治験が行われています。C型は既にウイルス排除が可能になり、B型の新薬も世界中がしのぎを削って研究しています。

患者会の目標である肝炎撲滅は大きく前進したのですが、重度の肝硬変・肝がんに苦しむ患者さんはまだたくさんおられます。また、自覚症状が乏しいので、発症しても簡単に治ると安易に考える人々が、今後増えるかもしれません。世の中全体が油断する危険があります。加えて、ウイルス性肝炎と入れ替わるように、脂肪性肝炎、今なお不明なことが多いNASH（非アルコール性脂肪性肝炎）や自己免疫性肝炎の患者が増えています。NPO法人東京肝臓友の会の役割はまだ大きなものがあると考えます。

政府は平成30年度12月から、私たちの念願である「肝硬変、肝がん患者への医療費助成制度」を実施しておりますが、その助成条件は私たちの要望からは程遠いものです。さらなる充実を求めて、本年も国会請願や議員への働きかけを強める予定です。他の患者団体ともしっかりと手を組み、一歩でも二歩でも前進するようがんばりたいと思います。

会員の皆様をはじめ、肝臓学会や専門医の先生方、また、私たちの活動に協賛してくださる団体、企業の皆様の暖かいご支援、ご協力を今年も引き続き寄せてくださいますよう心からお願い申し上げます。

最後に新しく迎えた年が皆様にとって良い年になることを祈念いたします。

●もくじ　東京肝臓のひろば　228号

新しい年を迎えて　東京肝臓友の会 理事長 川田義広 ・・・ 2

――市民公開講座 AIH・PBC・PSC 医療講演会――
「自己免疫性肝疾患を正しく学ぶ」

講演1 自己免疫性疾患（ＡＩＨ）
「治療の実際 ～ステロイドの話題を中心に～」・・ 2
国立病院機構信州上田医療センター院長 吉澤　要 先生

講演2 原発性胆汁性胆管炎（ＰＢＣ）
「ＰＢＣ治療の進歩、最近の話題」・・・・・・・・・・・・ 11
帝京大学医学部内科学講座　教授 田中　篤 先生

PBC・AIH・PSC通信・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
ジコメン・メディカル・シンヤク 寄稿 ・・・・・・・・・・・・・21
帝京大学医学部付属病院　田中　篤 先生

東京肝臓友の会　活動日誌（12月、1月）・・・・・・・・・・22

情報BOX ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
患者会からの行事案内
講演会のご案内

市民公開講座　AIH・PBC・PSC医療講演会

自己免疫性肝疾患を正しく学ぶ

【日時】　2018年11月25日（日）14時～16時
【場所】　TKP御茶ノ水カンファレンスセンター　ホール2A
【主催】　特定非営利活動法人　東京肝臓友の会

講演1　自己免疫性疾患（AIH）

「治療の実際　～ステロイドの話題を中心に～」

信州大学医学部附属病院消化器内科　特任教授
国立病院機構信州上田医療センター院長　吉澤　要先生

司会（米澤敦子）　定刻になりましたので、東京肝臓友の会主催の医療講演会を始めます。東京肝臓友の会事務局長をしております米澤敦子と申します。司会を担当いたします。よろしくお願いいたします。（拍手）

今日は会員さん以外の方も何名もいらっしゃるということで、東京肝臓友の会については、後ほど詳しくご説明をさせていただきます。私たちの会の中に、自己免疫性肝疾患の患者さんたちが作ります、自己免疫性肝疾患部会（PBC・AIH・PSC部会）があります。部会の会員は全国で250名ぐらいいらして、今日は、その方たちのために3名の先生にお越しいただきました。今まで複数の先生に講演をいただくことはなかなかなかったのですが、それぞれの疾患について、3人の先生に詳しくお話を伺いたいと思います。

それでは、最初のご講演です。「自己免疫性肝炎　治療の実際～ステロイドの話題を中心に」です。今日はわざわざ長野からおいでいただきました、信州大学医学部附属病院消化器内科特任教授、国立病院機構信州上田医療センター院長の吉澤要先生にお話をいただきたいと思います。吉澤先生、よろしくお願いいたします。（拍手）

吉澤　皆さん、こんにちは。寒い信州からやってまいりました。今日、こちらは暖かいですね。ほとんどの方にはお初にお目にかかりますので、簡単に自己紹介をします。1980年に信州大学を卒業して、1年臨床をしたあと、私は免疫学に興味があったものですから2年間は基礎免疫学を勉強しました。そのあと肝臓を専門にしつつ、アメリカへ留学したときも免疫を勉強しました。その後、肝臓専門医として主に信州大学で活動して、2012年に今の国立病院機構信州上田医療センターに赴任しました。2016年までは信州大学でも週1回肝臓外来もしておりました。

今日は、自己免疫性肝炎の患者さんが不安に思っているところに応えられればいいかなと思います。どんな病気なのかとか、いろいろ書いてありますけれども、順番にお話ししていきたいと思います（図1）。

1. どんな病気？

自己免疫性肝炎という病気は、1950年に初めて外国で発表されました（図2）。ある程度はっきり診断したのは、イアン・マッカイ（Ian Mackay）というオーストラリアの先生で、1956年に「ルポイド肝炎」と名前をつけました。マッカイ先生は、つい最近まで本も出され90幾つ（1922年March生ま

れ)ぐらいでご存命のようです。何回かお会いしたこともあります。1965年にマッカイ先生が自己免疫性肝炎という名前をつけまして、日本でも1979年に診断基準ができました。

自己免疫性肝炎にはHLA－DR4という遺伝子タイプの方が多いことは、信州大学の関健先生が日本で初めて発表しました。自己免疫性肝炎は遺伝的な素因があり、そこに何かが加わって起こるのではないか。また、ほかの自己免疫性の疾患もいろいろ合併することもあります。今でもまだあまりよくわかっていないところが多く、私も35～36年間、自己免疫性肝炎を研究しているのですが、申しわけないことになかなか進歩がないという、残念な思いがあります。

自己免疫性肝炎は、国の指定難病です。インターネットで「自己免疫性肝炎」と検索すれば、厚労省のホームページが出てきて一般の方向けにも書いてあります。自己免疫性肝炎はこうした病気で、まだ原因もよくわからないというのが正直なところです。

まず、日本にどのくらいAIHの患者さんがいらっしゃるでしょうか。私も、今日いらっしゃるお二人の先生方も入っている、厚労省の「難治性の肝・胆道疾患に関する調査研究」という研究班でいろいろアンケートをとって調べています。しかし大きな病院のアンケートだけではなかなかわかりません。私が上田に赴任したとき、病院に肝臓の専門医がいませんでした。そこで、人口約21万人の上田地域で、すべての医療機関や周りの医療圏の大きな病院に、患者さんを紹介していただくよう依頼したり、アンケートをとって、自己免疫性疾患の患者さんは何人ぐらいいらっしゃるのかを調べて、2年前ぐらいに発表しました。(Yoshizawa, 2016 Hepatology Research)、その時点で、15歳以上の人口10万人当たりどのくらいの患者さんがいるのか、1年間で新たにどのくらいの患者さんが発生するのかを調べたものです。

今日は新幹線で来ましたけれども、上田は東京まで1時間半と割合便利になりました。東京から新幹線で来ると、上田の次が長野です。松本はちょっと外れにあります。上田地域の真ん中に上田医療センターがあります。上田城は一昨年の大河ドラマで有名になりまして、真田幸村(信繁)の像が駅前に建っております。こういう21万人ぐらいの医療圏で患者さんを調べました。

2014年12月時点で、上田地域にどのくらいの患者さんがいるか。赤いの(左側の棒グラフ)が女性で、青いの(右側の棒グラフ)が男性です。女性は20代ぐらいからいらっしゃいます。男性のほうがお年の方に多いという分布でした(図3)。

あとはカルテをひっくり返したり多くの医療機関に問い合わせをして、2004年から毎年どのくらいの患者さんが見つかっているかを調べました。

これはそのときの論文からとった図です(図4)。11年間に、上田地域には15歳以上の患者さんが48人いました。人口10万人当たり25.6人です。毎年2.3人ぐらいの方が新しく発症しているのではないか。上田だけが特殊ではなくて、日本全体でだいたい同じではないかということで、日本全体の患者さんを推定しています。

ちなみにオランダやデンマーク

図1

本日の内容

自己免疫性肝炎の疑問、不安に答える

どんな病気？
　日本にはどのくらい患者がいるの？
治るの？
長生きできるの？
ステロイドってなんだか怖い
必要なの？
副作用は？
　副作用を防ぐには？

図2

自己免疫性肝炎

1950年　初の報告
1956年　Mackay　ルポイド肝炎
1965年　Mackay　自己免疫性肝炎
日本では
1979年　診断基準
1982年　HLA-DR4　Seki (信州大学), Gastroenterology
　遺伝的素因（他の自己免疫疾患の合併）
未だに、原因不明
詳しくはWebで　厚生労働省難病情報センター指定難病95

では、全人口でどんな病気の方がどのくらいかが全部きちんとわかるようになっているようです（図5）。そこでは18.3人とか23.3人ぐらいの有病率。人口10万人当たりで、1年に1.1人、1.68人ぐらい発症しています。日本は、今までは非常に少ないと言われていましたが、ある程度患者さんは多いのではないか。ここから計算すると、日本全国で2万人ぐらいの患者さんがいらっしゃって、10万人当たりで2人ちょっとの方が毎年発症しているのではないかと推測されます。

自己免疫性肝炎自体、まだ原因もわからないし、症状も個人によってだいぶ違いますので、本当に患者数が何人かはよくわかりません。ずっと慢性で知らない間に発症して、そのときにたまたま見つかった方もあります。ですから何年に発症したかは数えるのがなかなか難しいところがありますが、想像よりは意外と多いのではないかと考えました。あとは、教科書に載っているような典型的な症状が出なかったり、お年を召した方もいて、今まで原因不明と言われていた中にも自己免疫性肝炎の方がいらっしゃるのではないかと考えると、そんなにめったにない病気ではなく、見過ごされていることもあると考えています。

2. 治療法は？

ここから本題で、自己免疫性肝炎は治る病気なのかどうか、ということです。残念ながら今のところ、治療によって落ち着かせることはできるのですが、治ったという証拠を得るのはなかなか難しい。皆さんご存じだと思いますが、治療はステロイドホルモンです。「プレドニン」（プレドニゾロン）を体重当たり0.6～0.8mgで治療を始めます。うんと重症な方は、ステロイドパルス療法といって注射で500mgとか1,000mgを使ったりしますが、ALTが正常化したらゆっくりと減量する。この「ゆっくりと」が大事です。焦るとぶり返します。実際にはALTとかIgGの経過を見ながら減量していき、1日5～10mgの維持量で経過を見ていきます。

いつまでステロイドを使うかは非常に難しい問題で、欧米では、2年間落ち着いていると1回止めましょうとなっています。半分ぐらいの方が再発しまして、その時はまた量を増やして治療を始めるとなっています。日本では、中止をせずに少量をずっと維持することが多いです。ただし患者さんによって、どうしても止めたいという場合には中止する人もいます。その場合には、短い間隔で経過を見ていくようにして、再発したらすぐにステロイドを増量したり治療をすぐ再開できるようにしています。

治療薬は、日本ではステロイドホルモンが主です。最近アザチオプリン（「イムラン」「アザニン」）が保

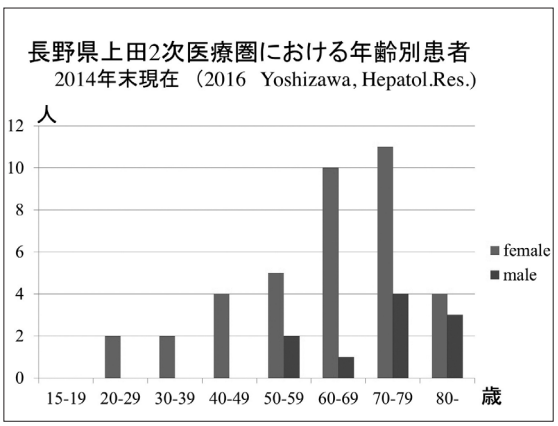

図3

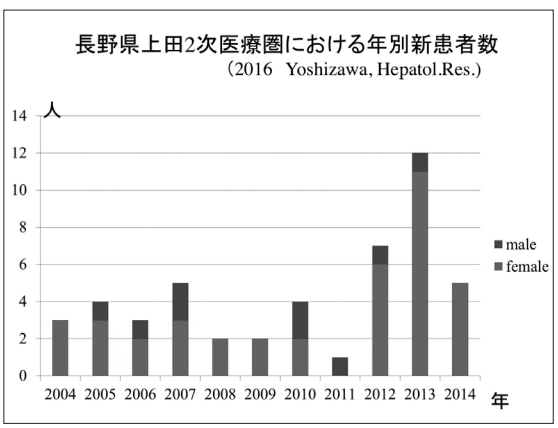

図4

国別患者数　有病率・罹患率

Country/region	調査期間	人口ベース	症例数	罹患率	有病率
Norway (Oslo)	1986-1995	130,000	25	1.9	16.9
Singapore	1992-1996	NM	24	NM	4
Alaska	1984-2000	100,312	49	NM	42.9
Spain (Valencia)	2003	1,774,736†	19	1.07	NM
Spain (Hospital de Sagunto)	1990-2003	112,003†	13	0.83	11.61
England (West Suffolk Hospital)	2003-2004	200,000	3	3	NM
Sweden	1990-2003	715,000	473	0.85	10.7
Taiwan	2000-2004	1,832,333	48	0.52	NM
New Zealand (Canterbury)	2001-2008	494,170	138	2	24.5
Australia (Canberra)	NM	NM	42	NM	8
Southern Israel	1995-2010	NM	100	0.67	11
オランダ	1964-2011	16,700,000	1,313	1.1	18.3
デンマーク	1994-2013	All Danish	1,721	1.68	23.9
日本（上田）(今回の調査)	2004-2014	187,205 (15歳以上)	48	2.33	25.6

図5

編集人・東京肝臓友の会　〇三（五九八二）二一五〇　〒161―0033　東京都新宿区下落合三―一四―二六―一〇〇一
発行人・障害者団体定期刊行物協会　〇三(六二七七)九六一一　〒157―0072　東京都世田谷区祖師谷三―一―一七―一〇二

東京肝臓友の会 主催 医療講演会

肝硬変と肝臓がんの新しい治療

～肝硬変の新薬と食事について～

2019年3月23日(土) 13：00～15：30

プログラム

13:00～14:00
講演：「肝硬変、肝がんこれからの治療について」
講師：竹原 徹郎 先生（大阪大学大学院消化器内科学教授、一般社団法人日本肝臓学会　理事長）

14:15～15:15
講演：「肝硬変・肝臓がんの食事について」
講師：鈴木 和子 先生（東京家政大学）

15:15～
新たな医療費助成制度について

会　場

TKP御茶ノ水カンファレンスセンター
（千代田区神田駿河台4-3
新お茶の水ビルディング2階）
JR御茶ノ水駅　聖橋口より徒歩1分

お申し込み

事前登録制です。電話・はがき・ＦＡＸのいずれかで、住所・氏名・電話番号・希望人数を明記の上「東京肝臓友の会」までお申し込み下さい。

主催：　NPO法人 東京肝臓友の会
〒161-0033 新宿区下落合3-14-26-1001
TEL 03-5982-2150
（火曜～金曜 10時～16時 ※祝日を除く）
FAX 03-5982-2151

入場無料
定員130名

須布価格500円(会費に含まれている)

本会報掲載の記事を転載する場合はご連絡ください。